



カズ・フグラー／ファッションデザイナー。東京生まれ、スイス人の父と日本人の母を持つ。現在はスイスをベースに、ヨーロッパに多くのファンを持つブランド「KAZU」のデザイナーとして活躍中。2011年より東日本大震災で壊滅的な被害を受けた陸前高田市で、地元女性たちとともに手仕事を活かしたビジネスプロジェクトを立ち上げ、2013年にはNPO「Three Cranes Association」を設立、復興支援に努めている。



1. スイスのアトリエにもたくさんの和柄の布が並び、2. 東北の布を使ってグランマたちと作り上げた製品のひとつ。和を意識したバッグはヨーロッパで注目を集めている。3. 陸前高田市のグランマたちと気合の掛け声を。4. 人と触れることで生まれる笑顔と絆が一番の財産だという。www.kazuhugger.com

★新世代の“ヴォーグ”な女たち。

Kazu Huggler

復興支援に東奔西走する
デザイナー、カズ・フグラーの夢。

Photo: Akira Yamada Text: Rieko Shibazaki

ヴォーグ ジャパンからの 5つの質問。

●あなたが今、いちばん欲しいものは？

子どもと一緒にいる時間。息子が2人いますが、自分がやりたいことが多すぎてつい欲張っちゃうので、もう少し彼らと一緒に過ごす時間があたらなと思います。

●5年後には、どこで何をしていたい？

今は年に4回くらい来日しているのですが、5年後はもっと深く日本と関わっていたいです。

●今、もっとも注目している人は誰？

特に誰というのはいないんです。ただ、運命を支配する神様というのがいるのであれば、その神様な(笑)。

●女でうれしいと感じる瞬間とその逆は？

なんでもできる自由な世代に生まれたので、女性に生まれていいことしかないです。ただ、自由なあまり選択肢がありすぎて、やりたいことにフォーカスしにくいときも。

●あなたを救う魔法の言葉は？

「愛」。この一言です。

遠くスイスにて東日本大震災の報道を耳にし、復興支援活動を決意したデザイナーのカズ・フグラー。被災した高校にミシンを寄付することからスタートし、現在は岩手県陸前高田市の女性たち(通称・グランマ)と地元の生地を使った布製品を生産する、手作業を活かした地域活性プロジェクトを遂行中だ。「同情で支援する時期は終わった」と語る彼女が、これから目指す未来とは一体？

「グランマたちとは、どのように出会ったのですか？」

「岩手県の県立高田高校にミシンを寄付した縁で、同校をたびたび訪れていました。当初私は子どもたちの心や生活の安定ばかり気にしていたんです。それが、何度か被災地に足を運ぶうちに、実際にそれらは周りの大人に確保されているものだとわかった。子どもの幸せを願うなら、まずは大人たちに仮設住宅の外に出てもらい、健康的な精神状況をつくってもらわないと。漠然とそういう思いを抱いているときに、『東北グランマ』という組織に出会ったんです」

「それはもともとあった組織なんですか？」

「はい。陸前高田に足を運び、たくさんの方々とお会いしましたが、そのなかに波に飲まれなかった自社工場を開放して、仮設住宅に住んでいるグランマ、おばあちゃんたちに手作業で物作りをしてもらい、それを販売するというプロジェクトを立ち上げている女性経営者がいらして。でも手作業では効率が悪いです。私がミシンをそこに提供するというところから、交流が生まれたんです」

「慈善事業からスタートしたものが、本格的なビジネスへと発展しているんですね」

「現地の方は生活もあるので、泣いてばかりはられませんから。ビジネスとしてはまだまだですが、スイスや日本の企業を中心に新しいオーダーも入るようになってきているので、頑張りたいですね。将来的にはグランマたちで、すべてを動かせる会社になるとうれしです。彼女たちは新しいアイデアを考えたり、とてもプロフェッショナルなんです。女性は本当に強いなとあらためて感じます」

「被災地に足を運んで、ご自身が最も学んだことは？」

「もちろんお金も大切なので、きれいな言葉ばかりは言っていられませんが、それでも人間と人間とのつながりがいかに大切かということを強く感じています」